

一切皆成の授記『法華経』  
— 「常不軽菩薩品」を中心に—

鈴木 隆泰

1 問題の所在

『法華経 (Saddharmapuṇḍarīka, SP)』では随所に、『法華経』や、その受持者を誹謗すると酷い報いを受けると説かれている(「譬喩品 (Aupamyā-parivarta) : 3<sup>2</sup>」<sup>3</sup>、「法師品 (Dharmabhāṅgaka-parivarta) : 10」<sup>4</sup>等)。その一方で、『法華経』を受持すると六根清浄を得るとも説かれている(「法師功德品 (Dharmabhāṅgakāmuśamsā-parivarta) : 18」<sup>5</sup>)。

これらの所説を前提とする「常不軽菩薩品 (Sadāparibhūta-parivarta) : 19」<sup>6</sup>では、「過去世に存在していた「常不軽」という名の菩薩は、經典の読誦等は一切行わず、増上慢の四衆(仏教徒)にひたすら成仏の授記をし続けた。そのことで彼は、増上慢の四衆から誹謗、迫害を受けた。増上慢の四衆は常不軽菩薩を誹謗、迫害した罪で無間地獄に墮ちた。」と説かれていると考えられてきた。しかし、ここに疑問が生ずる。それは、「なぜ『法華経』の受持・読誦・解説等をしていなかった常不軽菩薩を誹謗、迫害した四衆が、「譬喩品」等の記述の通りに酷い報いを受けたのか。」という疑問である。

この疑問に対しては従来、『法華経』は授記をする經典である<sup>7</sup>。授記をしていたことで、常不軽菩薩は実は『法華経』の唱導をすでに行なっていたのだ<sup>8</sup>。」との理解が一般的であったように思われる。たしかに「法師品 : 10」では総授記を行っており<sup>9</sup>、「『法華経』は授記をする經典である」という点においては、筆者も異論はない。しかし、それでもなお「そもそも、“この法門を受持・読誦・解説・書写せよ”と幾度も繰り返し強調している『法華経』が、經典なしで授記することを『法華経』の唱導、実践と見なしているのであろうか。」との疑問が払拭できない。この問いはとりも直さず、「常不軽菩薩品」は『法華経』の中でどのように位置づけられるのか。」との問いに直結する。

<sup>1</sup> 本稿は Suzuki [2016] を元に加筆、改稿を施したものである。

<sup>2</sup> 章の名称は便宜上、最も一般的と思われる SP<sub>C2</sub> のものを踏襲し、「:」の後に SP<sub>3</sub> における章番号を付した。

<sup>3</sup> SP<sub>3</sub> 60.1-99.7, SP<sub>7</sub> 28a4-44b8, SP<sub>C2</sub> 10b28-16b6, SP<sub>C1</sub> 73b5-79c29.

<sup>4</sup> SP<sub>3</sub> 224.1-238.5, SP<sub>7</sub> 96b6-102b3, SP<sub>C2</sub> 30b28-32b15, SP<sub>C1</sub> 99a27-102b20.

<sup>5</sup> SP<sub>3</sub> 354.1-374.9, SP<sub>7</sub> 151b4-159a7, SP<sub>C2</sub> 47c2-50b22, SP<sub>C1</sub> 119a17-122b21.

<sup>6</sup> SP<sub>3</sub> 375.1-385.7, SP<sub>7</sub> 159a8-163b8, SP<sub>C2</sub> 50b23-51c7, SP<sub>C1</sub> 122b28-124a2.

<sup>7</sup> 岡田 [2013: 276] [2014: 136] [2015], 荻谷 [2009: 517-518] 等。

<sup>8</sup> 荻谷 [2009: 502-536].

<sup>9</sup> ye pi kecid bhāṣajyārāja tathāgatasya parinirvāṣyemam dharmaparyāyām śroṣanti antaṣa ekagāthām api śrutvāntaṣa ekenāpi cittotpādenābhyanumodayiṣyanti tān apy aham bhāṣajyārāja kulaputrān vā kuladuhitṛ vā vyākaronmy anuttarāyāṃ samyak sambodhau/ (SP<sub>3</sub> 224.8-10) (また、薬王よ、如来の滅後(ス)にこの(妙法蓮華の)法門を聴く者たちがあつて、それかただ一つの偈を聞いて、そして喜ぶ心を発すのかただ一瞬であつたとしても、薬王よ、(如来である)私はそれらの善男子・善女人たちは誰であれ、無上正等覚を得るであろうと授記する)

sman gyi rgyal po gañ la la de bzin gśeḡs pa yonīs su mya ñan las 'das nas/ chos kyi mam grañs 'di ñan pa dañ tha na tshigs su bcaḍ pa gcig thos nas/ sems bskyed pa gcig tsam gyis kyañ rjes su yi rañ bar 'gyur bañ rigs kyi bu 'am rigs kyi bu mo de dag sman gyi rgyal po ñas bla na med pa yañ dag par rdzogs pañ byañ chub tu luñ bstan to// (SP<sub>7</sub> 97a4-6)

佛告薬王、又如(如来)滅度之後、若有人聞妙法華經乃至一偈一句一念隨喜者、我亦與授阿耨多羅三藐三菩提記 (SP<sub>C2</sub> 30c7-9)

佛告薬王、假使如来滅度之後、聞斯經典一偈四句、發意之頃代勸助者、佛皆授決、當得無上正真之道 (SP<sub>C1</sub> 100b20-23)

本研究はこれらの疑問への解答を通じて、『法華経』と授記の関係、および「常不軽菩薩品」の『法華経』における位置づけを考察する小論である。

## 2 「常不軽菩薩品」内容概観

まず、「常不軽菩薩品：19」の内容を概観しておく。

- (1) 釈尊がマハースターマブラーブタ (Mahāsthāmāprāpta, 得大勢) 菩薩に、『法華経』や『法華経』受持者を誹謗すると酷い報いを受けること、逆に『法華経』を受持すると六根清淨を得ることを念押しして告げる。<sup>10</sup>
- (2) 釈尊は過去世の話 (2)~(10) を始める。「はるかな過去世<sup>11</sup>に、ビーシュマガルジタスヴァララージャ (Bhīṣmagarjitasvararāja, 威音王) という名の如来が出現した。威音王如来は、声聞たちには縁起の理法を説き、菩薩たちには成仏へと向かう法を説いた。かの如来の入滅後、正法が過ぎ像法が滅尽したとき、同じ名前の如来が出現した。そしてその世界には、数多の威音王如来が順次出現した。<sup>12</sup>
- (3) 最初の威音王如来の入滅後の像法末期の時代に、増上慢<sup>3</sup>の仏教徒に近づいていって常に、「私はあなた方を軽んじません。あなた方は軽んじられない方々なのです。それはなぜかといえば、みなさんは、無上菩提に向けて菩薩行を行じてください。あなた方は成仏できるのです<sup>14</sup>。」と成仏の授記を行う出家菩薩があった。彼は經典の説示や読誦を行わなかった<sup>15</sup>。<sup>16</sup>
- (4) このように聞かされた仏教徒のほとんど全員は、彼に対して怒り、悪意を抱き、嫌悪の思いを生じ、「どうしてこの比丘は頼まれてもいないのに、“軽んじる心など持っていない”

<sup>10</sup> SP<sub>3</sub> 375.1-8, SP<sub>7</sub> 159a8-b3, SP<sub>2</sub> 50b24-28, SP<sub>1</sub> 122b29-c5.

<sup>11</sup> 劫はヴィニルボーガ (Vinirbhoga, 離衰), 世界はマハーサンブヴァー (Mahāśambhāvā, 大成) とされる。

<sup>12</sup> SP<sub>3</sub> 375.9-377.6, SP<sub>7</sub> 159b3-160a8, SP<sub>2</sub> 50b28-c14, SP<sub>1</sub> 122c5-20.

<sup>13</sup> 「方便品 (Upāyakaṅśaha-parivarta) : 2」 (SP<sub>3</sub> 29.1-59.7, SP<sub>7</sub> 14b1-28a3, SP<sub>2</sub> 5b24-10b20, SP<sub>1</sub> 67c29-73a26) では、阿羅漢果に達したと自認し、無上正等覺に向けた誓願を発すこともなく、「私は仏乗とは擲絶している」と語ったり、「これほどのものか、私の身体の最終的な涅槃である」と語ったりする者を「増上慢」と定義している。

api tu khalu punaḥ śāriputra yaḥ kaścid bhikṣur vā bhikṣuṇī vārhavtvaṃ pratijānīyād anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau prajñānam aparighyochochinno 'smi buddhayanādi iti vaded etāvan me samucchrayasya paścimakam parinirvāṇam vaded abhimānikam taṃ śāriputra prajānīyāḥ / (SP<sub>3</sub> 43.11-13)

śā nī bu yaṅ dge sloṅ nam dge sloṅ ma la la dgra bcom par khas 'che zīn/ bla na med pa yaṅ dag par rdzogs paī byān chub tu smon lam yoṅs su mi 'dzin te/ ŋa ni saṅs rgyas kyī theg pa bcaḍ pa'o 'zes zer zīn nā' lus 'dī tha ma mya ṅan las 'da' ba'o 'zes zer ba ni/ śā nī bu de lhag paī ŋa rgyal can du šes par bya'o// (SP<sub>7</sub> 21b8-22a2)

又舍利弗，是諸比丘比丘尼，自謂已得阿羅漢是最後身究竟涅槃，便不復志求阿耨多羅三藐三菩提，當知此輩皆是增上慢人。(SP<sub>2</sub> 7b29-c3)

若比丘比丘尼，已得羅漢自己達足，而不肯受無上正真道教，定爲誹謗於佛乘矣，雖有是意佛平等訓，然後至于般泥洹時，諸慢者乃知之耳。(SP<sub>1</sub> 69c24-27)

<sup>14</sup> nāham āyuṣmanto yuṣmākam paribhāvāmi/ aparibhūtā yūyam/ tat kasya hetoh/ sarve hi bhavanto bodhisattvacaryāṃ carantu/ bhaviṣyatha yūyam tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃbuddhā itī / (SP<sub>3</sub> 378.1-3)

kho bo ni tshe daṅ klan pa khyed la brāṣ par mi byed de/ khyed ni ma brāṣ pa'o// de ci' phyir 'ze na/ khyed thams cad kyis byān chub sems dpa' spyad pa spyod cig daṅ/ khyed de bzin gšegs pa dgra bcom pa yaṅ dag par rdzogs paī saṅs rgyas su 'gyur ro (SP<sub>7</sub> 160b5-6)

我深敬汝等不敢輕慢 所以者何 汝等皆行菩薩道當得作佛。(SP<sub>2</sub> 50c19-20)

諸賢無得輕慢自高 所以者何 諸賢志趣 當尚菩薩如來至眞等正覺 (SP<sub>1</sub> 122c24-26)

<sup>15</sup> sa bodhisattvo mahāsattvo bhikṣubhūto noddeśaṃ karoti na svādhyāyaṃ karoti (SP<sub>3</sub> 378.03-04)

byān chub sems dpa' sems dpa' chen po dge sloṅ du gyur pa de . . . luṅ yaṅ mi nod/ kha ton yaṅ mi byed de/ (SP<sub>7</sub> 160b6-7)

而是比丘，不專讀誦經典，但行禮拜。(SP<sub>2</sub> 50c20-21)

爲諸比丘講菩薩行，不受所誦不肯讀誦。(SP<sub>1</sub> 122c27-28)

<sup>16</sup> SP<sub>3</sub> 377.6-378.7, SP<sub>7</sub> 160a8-161a1, SP<sub>2</sub> 50c14-23, SP<sub>1</sub> 122c20-123a1.

などと告げるのか。求めてもいないのに偽って、私たちに無上菩提への授記をするとは、かえって私たちを軽んじているのだ」と誇ったり、罵ったりした。しかし、彼は誰に対しても怒ったり、敵愾心を起こしたりすることはなかった。<sup>17</sup>

- (5) 時には土塊や棒きれを投げつけられ、接近するのを拒まれた<sup>18</sup>。そのようなとき彼は、遠くから大声を出して成仏の授記を行った。<sup>19</sup>
- (6) 彼らは彼に「常に *sadā* “あなた方は軽んじられない *aparibhūta*” と告げる男<sup>20</sup>」であるとしてサダーパリーブータ (*Sadāparibhūta*, 常不軽) と名付けた。<sup>21</sup>
- (7) 死時に臨み常不軽は、すでに入滅した威音王如来が〔在世中に人知れず〕説いていた『法華経』を空中からの音声を通して聴き、受持し、「法師功德品：18」の所説の通りに六根清浄を得た。さらに神通力で寿命を大幅に増益し、像法末期の仏教徒たちに『法華経』を説き明かした。<sup>22</sup>
- (8) かつて彼に「常不軽」と名づけた増上慢の仏教徒たちは、彼に素晴らしい神通力の威力や、自らの主張についての弁才の力の威力や、智慧の力の威力があるのを知って、全員が彼に付き従い聞法者となった。彼は彼ら全員と、さらに他の多くのものたちを、『法華経』の解説を通して無上菩提に向けて教導した。<sup>23</sup>
- (9) 常不軽はそのマハーサンバヴァー世界で命終した後、幾度も輪廻転生しつつ、獲得した善根によって多くの如来に値遇し、全ての場合において『法華経』に得値し、仏教徒たちに説き明かした。そして「法師功德品：18」の所説の通り、全ての場合において六根清浄を得た。<sup>24</sup>
- (10) 以上のように、数多の諸仏に親近し、供養し、全ての場合において『法華経』に得値したという善根が完全に熟したので、常不軽は無上菩提を覚ってブツダと成った。<sup>25</sup>
- (11) 実は、私釈迦牟尼こそ、そのときの常不軽だったのだ。もし私が過去世において、この『法華経』を過去仏の空中からの音声や、現在仏の教示を通して獲得し、受持していなかったならば、このように速やかに無上菩提を覚ることはなかったであろう。私が過去世に数多の諸仏のもとでこの『法華経』を受持し、読誦し、説示したので、このように速やかに無上菩提を覚ったのである。<sup>26</sup>
- (12) かつて〔すでに入滅している〕威音王如来の教えのもとで、常不軽によって『法華経』を語り聞かされ (*SP<sub>C2</sub>* に欠<sup>27</sup>) “私はあなた方を軽んじません、皆さんは全員、菩薩行を行じて下さい、あなた方は成仏できるのです”と授記された仏教徒のうち、彼に面と向かって敵愾心を抱いた者たちは、永きにわたり三宝とは無縁となり、「譬喩品：3」等の所説の

<sup>17</sup> *SP<sub>S</sub>* 378.8–379.1, *SP<sub>T</sub>* 161a1–4, *SP<sub>C2</sub>* 50c23–28, *SP<sub>C1</sub>* 123a1–7.

<sup>18</sup> Suzuki [2017: 112] 参照。

<sup>19</sup> *SP<sub>S</sub>* 379.2–3, *SP<sub>T</sub>* 161a5, *SP<sub>C2</sub>* 50c28–51a1, *SP<sub>C1</sub>* 123a7–9.

<sup>20</sup> 荻谷 [1998: 263] [2009: 504–506] 参照。一方、定方 [2008: 37] はそれまでの先行研究を踏まえた上で、「作者の頭にあったのは *sadā + paribhūta* (常に軽侮された男) であつたと考えるのが自然であろう」と結論している。

<sup>21</sup> *SP<sub>S</sub>* 379.3–4, *SP<sub>T</sub>* 161a5–6, *SP<sub>C2</sub>* 51a1–3, *SP<sub>C1</sub>* 123a9–12.

<sup>22</sup> *SP<sub>S</sub>* 379.5–13, *SP<sub>T</sub>* 161a6–b3, *SP<sub>C2</sub>* 51a3–7, *SP<sub>C1</sub>* 123a12–18.

<sup>23</sup> *SP<sub>S</sub>* 379.13–380.5, *SP<sub>T</sub>* 161b4–6, *SP<sub>C2</sub>* 51a8–12, *SP<sub>C1</sub>* 123a18–22.

<sup>24</sup> *SP<sub>S</sub>* 380.6–381.3, *SP<sub>T</sub>* 161b6–162a4, *SP<sub>C2</sub>* 51a12–17, *SP<sub>C1</sub>* 123a23–b3.

<sup>25</sup> *SP<sub>S</sub>* 381.4–8, *SP<sub>T</sub>* 162a4–7, *SP<sub>C2</sub>* 51a17–21, *SP<sub>C1</sub>* 123b4–7.

<sup>26</sup> *SP<sub>S</sub>* 381.8–382.3, *SP<sub>T</sub>* 162a7–b4, *SP<sub>C2</sub>* 51a21–26, *SP<sub>C1</sub>* 123b7–13.

<sup>27</sup> この問題については、Suzuki [2017] が詳しく論じている。

通り、一万劫の間無間 (Avīci, 阿鼻) 地獄において酷い苦痛を受けたのであった。そしてそこで悪業の清算を自ら済ませて後に常不軽と再会し、彼から『法華経』を教示され無上菩提へ向かう者となった。<sup>28</sup>

- (13) かつて常不軽を愚弄・嘲笑し、そのせいで墮地獄した者たちは、この会衆の中にいる、バドラパーラ (Bhadrapāla, 跋陀婆羅)、シンハチャンドラー (Siṃhacandrā, 獅子月)、スガタチェータナー (Sugatacetanā, 思佛) をはじめとする五百人の菩薩、五百人の比丘尼、五百人の優婆夷<sup>29</sup>たちであり、(12) で述べたように、『法華経』を説く常不軽によって全員が無上菩提に向けて不退転の者とされたのである。<sup>30</sup>
- (14) このように、『法華経』の受持・読誦・説示が、諸々の菩薩たちにとって無上菩提獲得の資糧となるのである。それゆえ、如来の滅後には tathāgate parinirvṛte 諸々の菩薩たちは、『法華経』を常に受持・読誦・説示・解説しなくてはならない。<sup>31</sup>
- (15) 釈尊が全 12 偈 (内容的には重偈) を説く。<sup>32</sup>

### 3 考察

『法華経』が一切衆生の成仏可能性、一切皆成を説く經典であることは、古来広く認められているといえよう。では、『法華経』が一切皆成を主張する根拠とはなんだろうか。代表的解答を見ていくこととする。

まずは「一切衆生には仏性があるから<sup>33</sup>」というものである。世親の『法華経論』が代表例であるが、仏性を初めて提唱した經典が大乗『涅槃経』であり<sup>34</sup>、『涅槃経』が初期大乗經典である『法華経』よりも後の成立であることを考慮するとき<sup>35</sup>、この理解を採用することには無理があるものと思われる。

次は「諸仏の誓願が成就したから」<sup>36</sup>というもので、根底的な根拠として説得力がある。ただ、

<sup>28</sup> SP<sub>3</sub> 382.3-10, SP<sub>T</sub> 162b4-8, SP<sub>C2</sub> 51a26-b1, SP<sub>C1</sub> 123b13-20.

<sup>29</sup> SP<sub>C2</sub> では優婆塞 (SP<sub>C2</sub> 51b4).

<sup>30</sup> SP<sub>3</sub> 382.10-383.3, SP<sub>T</sub> 163a1-3, SP<sub>C2</sub> 51b1-5, SP<sub>C1</sub> 123b20-25.

<sup>31</sup> SP<sub>3</sub> 383.3-6, SP<sub>T</sub> 163a3-5, SP<sub>C2</sub> 51b5-9, SP<sub>C1</sub> 123b25-28.

<sup>32</sup> SP<sub>3</sub> 383.7-385.6, SP<sub>T</sub> 163a5-b7, SP<sub>C2</sub> 51b9-c7, SP<sub>C1</sub> 123b28-124a2. その中で、第4偈では SP<sub>C2</sub> にのみ、「命終に臨んで常不軽の罪を清算した (其罪畢已)」という記述が見える。

evaṃ ca saṃsṛāvayī nityakālam ākrośaparibhāṣa sahanu teṣāṃ/ kālakriyāyā samupasthitāyām śrutam idaṃ sūtram abhūsi tena/4// (SP<sub>3</sub> 384.1-2) (常にこのように〔語って〕聞かせては、彼らの誹りや罵りにも堪え忍んでいた。〔そして〕命終に臨んだときに、彼はこの經典を〔空中からの音声を通して初めて〕聞いたのであった。)

de bžin rtag tu yañ dag bserags pa na// gše žin brygad pa de dag bzod par byed// 'chi ba'i dus byed nie bar gnas pa dañ// de yis mdo sde 'di ni thos gyur nas// (SP<sub>T</sub> 163a8-b1)

諸人聞已、輕毀罵詈、不輕菩薩、能忍受之、其罪畢已、臨命終時、得聞此經、六根清淨、(SP<sub>C2</sub> 51b17-19)

罵詈輕毀、每見形笑、彼時常爲、便聞此言、假使得聞、此經去時、若復住立、設有所作、時明慧者、臨欲壽終、用分別說、此正法華、(SP<sub>C1</sub> 123c8-11)

この問題については、Suzuki [2017] が詳しく議論している。

<sup>33</sup> 示現衆生皆有佛性故 (T. no. 1519, Vol. 26, 9a14), 示諸衆生皆有佛性故 (T. no. 1520, Vol. 26, 18b8).

<sup>34</sup> Radich [2015] 参照

<sup>35</sup> Suzuki [2001] 参照

<sup>36</sup> 第二章「方便品」の所説について、平川 [1980: 447] より引用する。

第100偈には、

この仏の教えを聞いて成仏しない衆生は一人もいない。何となれば、菩提のために修行し、またそれを修行せしめることが、諸の如来の誓願 (prañidhāna) であるからである。

と説いている。

最も直接的な根拠としては、「ブツダに授記されたから」<sup>37</sup>というものであろう。先に「諸仏の誓願」があり、それが成就したからこそ、諸仏は一切衆生に成仏の授記ができることになる。そして、その一切皆成の授記を行う経典が、『法華経』なのである。

ここで次のような疑問が起ころうかもしれない。それは、

- ・ 『法華経』が一切皆成の授記を行う経典であるならば、たとえまだ『法華経』を得ていなかったとしても、実質的には(3)(4)(5)の段階で『法華経』を唱導していたといえるのではないか。

という疑問である。それに対する答えは、

- ・ いえない。常不軽の呼びかけ(3)(4)(5)は、一切皆成の授記にはならない。

である。これに対してはさらに、

- ・ なぜ常不軽の呼びかけ(3)(4)(5)が、一切皆成の授記にならないのか。

という疑問が起ころう。答えるに、

- ・ 成仏の授記ができるのはブツダだけだからである。ブツダのことは(仏語)なくしては、授記はできないからである。

その時点(3)(4)(5)では常不軽は、まだ『法華経』を得てはいなかった。ブツダのことである『法華経』を得て後、常不軽の呼びかけははじめて成仏の授記となったのである。

では、

- ・ 常不軽が『法華経』に出会ったのはいつであろうか。

といえば、それは、

- ・ 臨終間際の(7)において

である。その理由は二つある。まずは、

- ・ (7)ではじめて六根清浄を得ているから

である。『法華経』を受持すると六根清浄を得ることが、本章の教説の大前提(1)だから

---

これが、以上の種々なる成仏の行の結論と言ってよいであろう。すなわち衆生を成仏のために修行せしめることが、諸仏の誓願である。この誓願に乗じて、衆生は成仏に導かれるわけである。

<sup>37</sup> 岡田 [2013: 276] より引用する。

法華経は一切の人々が仏になれることを説く。成仏するかどうかについては、ブツダ在世の時代に行われていたように、仏のことが必要である。釈迦仏がすでにいないこの世界において、現に存在する仏によって「あなたは仏になります」と説かれなければならぬわけである。

鈴木 [2014: 37-38] より引用する。

修行の果報のみに基づいて成仏が保証される「業報成仏」が「法の絶対視」であるのに対し、修行の果報に加え、先達のブツダによって成仏が保証される「授記作仏」は、「ブツダの絶対視」とも呼べる思想である。この思想は、成仏し涅槃に到達した釈尊と他の仏弟子たちとの差を強調するとともに、弟子としてブツダの声は聞いたが、授記を得ていないため成仏できない仏弟子(声聞)たちが成仏していない阿羅漢(供養や尊敬を受けるに相応しい聖者)の状態にとどまることを正当化することとなった(田賀[1966][1974]、塚本[1986])。

—中略—

声聞の不成仏は、『法華経』において釈尊が声聞たちへの授記を行ったことによってその根拠・正当性を失うことになった。

らである。そして、その後輪廻転生を繰り返す、諸仏のもとで『法華経』に出会う度に、常不軽は六根清浄を得ている (9)。

二つ目の理由は、

- ・ 最初の威音王如来は在世中、『法華経』を説いていないから

である。聞法対象として声聞と菩薩を分け、菩薩のみに成仏への教えを説いている以上 (2)、最初の威音王如来は、一切皆成の授記である『法華経』を公には説いていないことになる。最初の威音王如来が在世中に『法華経』を説いていない以上、(3)(4)(5)において常不軽が『法華経』を唱導できる道理がないことになる。

一切皆成の授記をしたい常不軽は、『法華経』を得ていない状態で実行せざるをえなかった (3)。しかし彼の呼びかけは「ブツダのことは」ではなかったため、当然ながら増上慢の仏教徒たちは「偽りの授記をして、私たちを軽んじている」と彼に対して怒り、悪意を抱き、嫌悪の思いを生じ、謗ったり罵ったりした (4)。時には土塊や棒きれを投げつけることもあった (5)。 (4)(5) の仏教徒たちが彼に「常不軽」と名づけたのである (6)。

しかし、(4)(5)(6) の仏教徒たちであっても、常不軽が『法華経』を得た (7) 以降は、『法華経』というブツダのことは語る常不軽にブツダと同様の力があるのを知って、全員が聞法者となり無上菩提へと教導されたのであった (8)。

ここで次のような反論が呈せられるかもしれない。

- ・ いや、やはりそうではない。常不軽は (3)(4)(5) の段階ですでに『法華経』を得ていた。なぜなら、(4)(5)(6) の仏教徒たちは常不軽を謗って無間地獄に堕ちたのだから ((12)(13))。『法華経』を受持すると六根清浄を得ることが本章の教説の大前提というのであれば、『法華経』や『法華経』受持者を誹謗すると酷い報いを受けることも、本章の教説の大前提であろう (1)。

本稿筆者は、“『法華経』や『法華経』受持者を誹謗すると酷い報いを受けることも、本章の教説の大前提”という点には完全に同意する。しかし、『法華経』を説く常不軽を謗って無間地獄に堕ちたのは、(4)(5)(6) の仏教徒たちではない。無間地獄に堕ちたのは、常不軽が『法華経』を得た (7) 以降に彼に面と向かって敵愾心を抱き、愚弄・嘲笑した者たちである。理由は三点ある。

#### 理由1

- ・ 墮地獄の者たちは、“『法華経』を説き聞かせ授記を与えた常不軽”に敵愾心を抱いた ((12))。この“『法華経』を説き聞かせ授記を与えた常不軽”という記述は (3)(4)(5) には見いだされない。かえって“經典の教示や読誦を行わなかった”と、『法華経』を含めた經典の説き聞かせを行っていないことが明示されている (3)。

#### 理由2

- ・ 墮地獄の者たちは、『法華経』を説き聞かせる常不軽に面と向かって敵愾心を抱き愚弄・嘲笑したせいで酷い報いを受けた ((12)(13))。一方、(4)(5)(6) の仏教徒たちは常不軽に対して怒り、悪意を抱き、嫌悪の思いを生じ、謗ったり罵ったりし (4)、時には彼の接近を阻止するために土塊や棒きれを投げつけたり (5)、彼に「常不軽」という名をつけたりしても (6)、彼に面と向かって敵愾心を抱き愚弄・嘲笑したとの記述は見られない ((4)(5))<sup>38</sup>。

<sup>38</sup> 荻谷 [2009: 530, 536] 参照

### 理由3

- ・ (4)(5)(6)の仏教徒たちは、常不軽が(7)において『法華経』に出会った後は、その世で全員が彼に教導され『法華経』の間法者となり、無上菩提へ向けて歩いていった(8)。これは、「墮地獄の者が泳ぎにわたり三宝とは無縁となり、地獄で業の清算を終えた後に常不軽と再会して『法華経』を教示され無上菩提へ向かった」という記述(12)と矛盾する<sup>39</sup>。

以上の三点が理由である。このように、「常不軽菩薩品：19」には、

- ・ “『法華経』に出会う前の、『法華経』という仏語なしに無効な授記をしていた常不軽”を誹謗した者たち
- ・ “『法華経』に出会った後の、『法華経』という仏語をもって有効な授記をしていた常不軽”を誹謗した者たち

という、二種類の誹謗者があったのである。

ここで上記の考察をまとめ、「常不軽菩薩品：19」の主題を提示する。

- ・ 自らを含めた一切衆生の無上菩提獲得のため、如来滅後には『法華経』を受持・読誦・説示・解説せよ(11)(14)。すなわち、如来滅後にはブツダのことはである『法華経』を語り聞かせ、一切衆生に成仏の授記をするという如来の仕事を代行せよ。如来滅後にはそれ以外に授記をして一切衆生を成仏させる方法はない。その利他行によって自らも速やかに無上菩提を得るという自利がもたらされる(『法華経』の受持・読誦・説示・解説を通して、自利利他が自然に円満する)。

## 4 結論

『法華経』「法師品：10」では、如来の滅後に *tathāgatasya parinirvāṭasya*、一切皆成の授記を行うブツダのことは『法華経』を説き聞かせる法師 *dharmabhāṅka* は、如来の使い *tathāgatadūta* であり、如来の仕事の代行者 *tathāgata-kṛtyakara* であり、如来であると知られるべき *tathāgato veditavyaḥ* とされている。『法華経』の制作者たちは、釈尊入滅後の〈無仏の時代〉という強い意識のもと、ブツダの意義を、説法によって現在化され衆生を利益する〈現実のハタラクイ〉と捉えたのである<sup>40</sup>。

<sup>39</sup> 荻谷 [2009: 530] 参照。

<sup>40</sup> 鈴木 [2006: 198-199] より引用する。

『法華経』における如来・ブツダは、『法華経』の菩薩である法師の説法を通じてはじめて、歴史上の特定の時点の特定の説法の場に「ことば」として現在化し、衆生を無上菩提に導くという利益をなす。たしかに、釈尊は入滅してもその永遠の現存は、「涅槃界への入定」や「崇拜対象としての遺骨・仏塔」、そして「遺した教え」というかたちで、観念的には保証されていた。しかし、ブツダが歴史上の特定の場に現在化することなく、無上菩提に向けた衆生済度を果たし得ない状況は、「如来・ブツダの唯一の仕事は衆生に仏知見 *tathāgatājñānadarśana* を得させること」と確信する『法華経』の菩薩たちにとって、実質上〈無仏の時代〉と変わらない。以上のことから、『法華経』はブツダの意義をその〈存在〉ではなく、説法によって現在化され衆生を利益する〈現実のハタラクイ〉と捉えていることが知られる。歴史を超えた法身でありながら、法師の説法を通じて歴史上の特定の場に現在化し衆生に利益をなす「ことば」、および、ことばとなって開顕される真理(如来・ブツダ)と重なり合う「語り手であり模倣者である法師」こそ、『法華経』の提示するブツダ観の基本と言ってよい。—中略—

『法華経』においては「如来の滅後 *tathāgatasya parinirvāṭasya*」という教導者なき時代に、如来の肩代わりをする「如来の仕事の代行者 *tathāgata-kṛtyakara*」である法師が、その時点では成仏していないことが明確にされた上で、あえて如来と等置されている。『法華経』の菩薩たちは、釈尊入滅後の〈無仏の時代〉という強い意識

その後、「見宝塔品 (*Stūpasamdarśana-parivarta*) : 11」<sup>41</sup>、「勸持品 (*Utsāha-parivarta*) : 12」<sup>42</sup>、「安樂行品 (*Sukhavihāra-parivarta*) : 13」<sup>43</sup>、「從地涌<sup>44</sup>出品 (*Bodhisattvapṛthivīvarasamudgama-parivarta*) : 14」<sup>45</sup>では、如来の滅後に、誰がどのようにこの『法華經』を受持し説示するかを問われ続ける。

そして続く「如来寿量品 (*Tāhāgatāyuspramāṇa-parivarta*) : 15」<sup>46</sup>と「分別功德品 (*Puṇyaparyāya-parivarta*) : 16」<sup>47</sup>では、如来の滅後であっても、『法華經』が説示される限りブツダ如来である釈尊は永遠にこの世に現存し、衆生利益の〈ハタラキ〉をなし続けると説かれる<sup>48</sup>。

その後、「分別功德品 : 16」<sup>48</sup>、「隨喜功德品 (*Anumodanāpuṇyanirdeśa-parivarta*) : 17」<sup>49</sup>、「法師功德品 : 18」では、『法華經』受持の様々な功德を説くことで、『法華經』が受持され説示されることを勧め、如来の滅後に衆生を利益する釈尊の〈ハタラキ〉が実現しやすくなるよう配慮されている。

そして「常不輕菩薩品 : 19」では、「法師功德品 : 18」の流れを引き継ぎ、『法華經』受持で六根清浄が得られることを再説示しつつ、如来の滅後には、一切皆成の授記を行うブツダのことは『法華經』を説き聞かせることによるのみ、如来の仕事の代行、すなわち、説法によって現在化され衆生を利益する〈現実のハタラキ〉が実現されることを、改めて強調している。しかもその利他の〈ハタラキ〉をあらしめることで、説示者も速やかに無上菩提を獲得でき、『法華經』が自利利他円満していることも示されている。

そして、「從地涌出品 : 14」で登場した地涌の菩薩に、自利利他円満の『法華經』を委嘱し、釈尊滅後の受持・説示を教誡する「如来神力品 (*Tāhāgatarddhyabhisamkāra-parivarta*) : 20」<sup>50</sup>へと自然に接続していくのである。

このように、「常不輕菩薩品 : 19」は決して特殊なものではなく、「法師品 : 10」にはじまり「如来神力品 : 20」に至る、釈尊滅後における、『法華經』の受持・説示を通じた、釈尊の衆生利益の〈ハタラキ〉の永遠の存続、これを実現させようとするテーマの文脈上に、無理なく位置づけられることがわかる。

---

のもと、ブツダの意義をその〈存在〉ではなく、説法によって現在化され衆生を利益する〈現実のハタラキ〉と捉えた上で、〈説く人と説かれる真理との重なり合い〉という仏教における真理の開顯のされ方に極めて自覚的であったかゆえに、自らが果位の釈尊を模倣して、ブツダの〈ハタラキ〉を代行することを可能にした。そこに、『法華經』において法師が<sup>51</sup>“tathāgato veditavyah”という宣言の下に如来と重ね合わされる本質的意義と理由があったのである。

<sup>41</sup> SP<sub>3</sub> 239.1–256.6, SP<sub>7</sub> 102b3–110b2, SP<sub>2</sub> 32b16–34b22, SP<sub>1</sub> 102b21–105a25.

<sup>42</sup> SP<sub>3</sub> 267.1–274.11, SP<sub>7</sub> 115b3–118b4, SP<sub>2</sub> 35c27–37a1, SP<sub>1</sub> 106a26–107b8.

<sup>43</sup> SP<sub>3</sub> 275.1–296.3, SP<sub>7</sub> 118b4–127a3, SP<sub>2</sub> 37a9–39c17, SP<sub>1</sub> 107b15–110b15.

<sup>44</sup> 「涌」(SP<sub>2</sub> 39c18)を、宋・元・明・宮本に従い訂正。

<sup>45</sup> SP<sub>3</sub> 297.1–314.6, SP<sub>7</sub> 127a3–135b5, SP<sub>2</sub> 39c18–42a28, SP<sub>1</sub> 110b16–113a21.

<sup>46</sup> SP<sub>3</sub> 315.1–326.13, SP<sub>7</sub> 135b6–141a4, SP<sub>2</sub> 42a29–44a4, SP<sub>1</sub> 113a22–115b8.

<sup>47</sup> SP<sub>3</sub> 327.1–344.7, SP<sub>7</sub> 141a4–148a2, SP<sub>2</sub> 44a5–46b13, SP<sub>1</sub> 115b15–117c29.

<sup>48</sup> 鈴木 [2009: 7–14] [2010] [2015: 32–33] 参照。

<sup>49</sup> SP<sub>3</sub> 345.1–353.8, SP<sub>7</sub> 148a3–151b4, SP<sub>2</sub> 46b21–47c1, SP<sub>1</sub> 118a1–119a16.

<sup>50</sup> SP<sub>3</sub> 386.2–394.8, SP<sub>7</sub> 163b8–167b4, SP<sub>2</sub> 51c9–52c2, SP<sub>1</sub> 124a4–125a7.



〈略号および使用テキスト〉

SP	<i>Saddharmapuṇḍarīka</i> . (『法華経』)
SP <sub>s</sub>	<i>Saddharmapuṇḍarīka</i> , ed. H. Kern and B. Nanjio, St. Petersburg, 1908–1912.
SP <sub>T</sub>	Tibetan version of the SP, P no. 781, N no. 101, S no. 141, T no. 142.
SP <sub>C2</sub>	Second Chinese version of the SP, T. no. 262 (『妙法蓮華経』七卷, 鳩摩羅什訳).
SP <sub>C1</sub>	First Chinese version of the SP, T. no. 263 (『正法華経』十卷, 竺法護訳).
P	Peking Kanjur
N	Narhang Kanjur
S	Stog Palace Manuscript Kanjur
T	Tokyo Manuscript Kanjur
T.	Taisho Tripiṭaka

〈参考文献〉

- 岡田行弘 [2013] 法華経の誕生と展開, 『智慧/世界/ことば—大乘仏典I— (シリーズ大乘仏教 第四巻)』(桂紹隆/斎藤明/下田正弘/末木文美土編), 東京: 春秋社, 271–303.
- [2014] 『法華経』における教えの展開と実践, 『日本佛教学会年報』79, 135–160.
- [2015] 「総合経典」としての法華経—信仰の対象, 仏そのもの—, 『中外日報』(2015年3月4日付, 論).
- 荻谷定彦 [1998] 『法華経』常不軽菩薩の考察—共生の思想にかかわって—, 『日本佛教学會年報』64, 261–280.
- [2009] 『法華経〈仏滅後〉の思想』, 大阪: 東方出版.
- 定方 晟 [2008] 法華経「常不軽菩薩品」の読み方—常被軽か常不軽か—, 『在家仏教こころの研究所紀要』3, 31–38.
- 鈴木隆泰 [2006] Tathāgato Veditavyaḥ—如来であると知りなさい—, 『法華経と大乘経典の研究』(望月海淑編), 東京: 山喜房佛書林, 185–208.
- [2009] 仏塔信仰の脈絡より辿る『法華経』と如来蔵・仏性思想の関係, 『日蓮仏教研究』3, 5–27.
- [2010] 起塔を通した永遠の釈尊の感得—『法華経』のブツダ観—, 『宗教研究』363 (83-4) (第六十八回日本宗教学会学術大会紀要特集), 373–374.
- [2014] 大乘経典における授記と灌頂, 『アジアの灌頂儀礼—その成立と伝播—』(森雅秀編), 京都: 法蔵館, 36–57.
- [2015] デイズニー映画 *Frozen* に見える宗教的世界観・人間観—レリゴアと仏教—, 『山口県立大学大学院論集』16, 15–36.
- 田賀龍彦 [1966] 燃燈仏授記について, 『金倉博士古稀記念・印度学仏教学論集』, 京都: 平楽寺書店, 89–107.
- [1974] 『授記思想の源流と展開—大乘経典形成の思想史的背景—』, 京都: 平楽寺書店.
- 塚本啓祥 [1986] 『法華経の成立と展開—インド文化と大乘仏教—』, 東京: 佼成出版社.

- 平川 彰 [1980] 開三顯一の背景とその形成, 『法華経の思想と基盤』(中村瑞隆編), 『平川彰著作集 第6巻』再所収, 1989, 東京: 春秋社, 425-466.
- Radich, M. [2015] *The Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra and the Emergence of Tathāgatagarbha Doctrine*, Hamburg.
- Suzuki, T. [2001] The Recompilation of the *Mahāparinirvāṇasūtra* under the Influence of the *Mahāmeghasūtra*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 98 (49-2), 34-38.
- [2016] The *Saddharma-puṇḍarīka* as the Prediction of All the Sentient Beings' Attaining Buddhahood: With Special Focus on the *Sadāparibhūta-parivarta*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 139 (64-3), 113-121.
- [2017] "Qizui biyi" Having Atoned for His Sin: Nichiren and Sadāparibhūta, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 142 (65-3), 109-117.

〈Keywords〉 『法華経』のテーマ, 如来滅後の授記, 「常不軽菩薩品」における二種類の誹謗者, 釈尊の〈ハタラクイ〉

すずき たかやす 山口県立大学教授

The *Saddharmapuṇḍarīka* and the Assurance  
of All Sentient Beings' Attaining Supreme Enlightenment:  
With Focus on the *Sadāparibhūta-parivarta*

SUZUKI, Takayasu

While the *Saddharmapuṇḍarīka* (*Lotus Sūtra, SP*) repeatedly teaches that any person who speaks against the *SP* or against those who uphold the *SP* must experience severe retribution, it also states that those who uphold its teachings will attain purification of the six senses. Chapter 19, *Sadāparibhūta-parivarta*, which is based on these theories, relates how a *bodhisattva* in ancient times named Sadāparibhūta (“Never Despising”) never engaged in reading sutras but constantly assured self-satisfied Buddhist followers that they would attain future enlightenment. Consequently, he was denigrated and persecuted. For this sin, his critics went to hell. However, a question arises as to why the four kinds of Buddhist disciples who criticized Sadāparibhūta, who did not read or explain the *SP*, went to hell. The conventional reading is that the *SP* offers the assurance of future enlightenment. By assuring of future enlightenment, it is generally believed that Sadāparibhūta had already accepted the instructions of the *SP*. In this case, however, the question of why the *SP*—which repeatedly admonishes its readers to adhere to, read, and explain the *SP*—regards upholding the assurance of enlightenment in the absence of the sutra as obeying and practicing the *SP* cannot be swept aside. Is the doctrine of Chapter 19 a special case? In the process of answering the question for this study, I discuss the relationship between the *SP* and the assurance of enlightenment (*vyākaraṇa*), as well as the significance of Chapter 19 in terms of its teachings. My conclusions follow.

Chapter 10 of the *SP, Dharmabhāṅga-parivarta*, states that after the Buddha has entered into perfect peace (*parinirvṛta*), preachers who expound and explain the *SP* (considered as the words of the Buddha)—offering the assurance that all sentient beings will become enlightened—are agents of the Buddha, doing his “function.” Therefore, they should be known as Buddhas themselves. The compilers of the *SP* were deeply aware that they lived in the “Buddha-less Age” after the Buddha Śākyamuni’s entering into perfect peace, and they understood that bringing the Buddha’s significance into the present through discourse of the *SP* was the “actual function” benefiting all sentient beings. The next chapters (from Chapter 11, *Stūpasamdarśana-parivarta*, to Chapter 14, *Bodhisattvapṛthivīvarasamudgama-parivarta*) continue to question who will uphold and expound the *SP* after the Buddha has entered into perfect peace, as well as how these efforts will be accomplished. Chapter 15, *Tathāgatāyuspramāṇa-parivarta*, and Chapter 16, *Punya-paryāya-parivarta*, explain that even after his *parinirvṛta*, Śākyamuni will be eternally present in this world as long as the *SP* is expounded, continuing to carry out the function of benefiting all sentient beings. From Chapter 16 to Chapter 18, *Dharmabhāṅgakānuśaṃsā-parivarta*, the sutra explains the various merits of upholding and expounding it, in order to make the function of Śākyamuni to benefit all sentient beings easier to achieve after the Buddha’s entering into perfect

peace. Chapter 19 explains again that upholding the *SP* results in the attainment of purification of the six senses. Further, it emphasizes that after the Buddha's entering into perfect peace, only by explaining and expounding the *SP*—the words of the Buddha giving assurance that all sentient beings will attain enlightenment—can the actual function of benefiting all sentient beings by bringing the Buddha's significance into the present through Dharma discourses be performed. It is also explained that by bringing into existence this function of benefiting others, the one who expounds the *SP* can rapidly attain supreme enlightenment. This discussion leads naturally into Chapter 20, *Tathāgatarddhyabhisamkāra-parivarta*—containing admonishments on upholding and expounding the *SP* after the Buddha Śākyamuni's entering into perfect peace—in which accomplishments for self-benefit and the benefits of others in terms of the *SP* are entrusted to the “Bodhisattvas from the Earth,” who first appear in Chapter 14.

Chapter 19 is far from a special case; rather, it fits unproblematically into the context of the main theme of the *SP*: that Śākyamuni's function of benefiting all sentient beings continues eternally after his entering into perfect peace by means of the upholding and expounding of the *SP*.